

顔は喧嘩、心はド純愛。

老舗和菓子の怖すぎる跡取り・岩永剛志（３３）は、
ライバル店の跡取り・藤村透真（２８）と、
月に一度の夜の厨房で二人きり結ばれていく純愛

碧汐

目次

第一章　喧嘩を売りに来たような男　1
第二章　条件の紙　7
第三章　月に一度の厨房　13
第四章　同盟の顔　18
第五章　祇園祭の夜店　24
第六章　選ばれている、ということ　28
第七章　看板の条件　34
第八章　条件の書き換え　40
第九章　初めての夜　45

第一章　喧嘩を売りに来たような男

「藤村さん。うちと、組んでいただけませんか」

その男は、喧嘩を売りに来たような顔で、婚約を申し込んできた。

京都・西陣の外れにある老舗和菓子店

「巌月堂」

の跡取り、岩永剛志（いわなが・つよし）、三十三歳。身長は百九十近く、肩幅は座敷の入り口いっぱいに広く、眉は太く、目は三白眼気味に鋭く、口元はいつもへの字に結ばれている。幼稚園児なら泣く。大人でも、初めて会えば大抵の人間が一歩引く。その男が、うち

「藤波堂」

の応接間で、最敬礼のような角度で頭を下げていた。

「……組む、とは」

俺、藤村透真（ふじむら・とうま）、二十八歳。藤波堂の跡取りで、五代目になるはずの男。座布団の上で背筋を伸ばしたまま、相手の次の言葉を待った。

「同盟です。巌月堂と藤波堂で、仕入れと配送と、催事の出店枠を共有する。……そして、その証として」

剛志は一度、ごくりと喉を鳴らした。怖い顔のまま、耳だけが赤い。

「あんたと、俺の、婚約を」

静まり返った応接間で、庭の鹿威しが、かこん、と間抜けな音を立てた。

始まりは三か月前、業界の懇親会だったらしい。原材料の高騰、職人の高齢化、百貨店の催事枠の縮小。百五十年続く巌月堂も、九十年続くうちも、単独では十年先が見えない。両家の当主――俺の祖父と、剛志の祖父は若い頃からの腐れ縁で、酒の席で

顔は喧嘩、心は ド純愛。

「いっそ家同士くっつけてしまえ」

と笑い合ったのが、冗談では済まなくなった。同性同士の婚約に法的な婚姻の形は取れない。だが、パートナーシップの宣誓と、両家の事業提携契約を結び、二人が

「家同士の同盟の顔」

になる。それが今回の話の骨格だった。

候補に挙がったのが、両家それぞれの跡取り。つまり、彼と、俺。

「祖父同士の話で済ませる気は、ありません」

剛志は下げた頭を上げ、真っ直ぐに俺を見た。目つきは人を脅す時のそれなのに、声は驚くほど静かだった。

「家のための話なのは、確かです。でも、最後に決めるのは、あんたです。俺も、俺自身で決めました。……だから今日は、正式な申し入れの前に、まず、あん

たの条件を聞きに来ました」

「条件」

「はい。婚約するにあたって、あんたが出したい条件。全部、聞きます。できることは全部やります。できないことは、できないと、その場で言います。嘘の約束は、しません」

その時、彼の大きな手が、膝の上に置かれていた小箱を、そっと俺の方へ滑らせた。巌月堂の包装紙に包まれた、季節の生菓子。銘は

「初嵐」。

白い練り切りの表面に、薄く引かれた青の刷毛目が、嵐の前の空の色をしていた。

「交渉のたびに、菓子を持ってきます。……味の方は、顔と違って、信用してもらえると思うんで」

自虐めいた言葉を、彼は照れもせず言った。俺は思わず、吹き出しそうになるのを堪えた。

顔は喧嘩、心のほうは、どうやら全然違うらしい。

その日の交渉は、一時間で終わった。俺は即答しなかった。しない、と決めていたし、彼も即答を望まなかった。

「条件を考えてきてください。紙に書いてきてもらえると、助かります」。

帰り際、彼は玄関で九十度に頭を下げ、大きな体を窮屈そうに折って靴を履き、商店街の向こうへ歩いていった。後ろ姿は、どう見ても極道映画の人だった。その背中を見送りながら、俺は懐紙に挟んでおいた

「初嵐」

を一つ、口に運んだ。

――うまい。

練り切りの甘さが、舌の上で静かにほどける。中の白餡に、ほんの少しだけ柚子の皮が効いていて、嵐の前の空気の、あの少しだけ湿った匂いがした。

顔はあんなに怖いのに、こんなに繊細な味を作るのか、この男は。

その夜、俺は机に向かい、条件を書き出した。事業の条件、生活の条件、家同士の約束事。書きながら何度も、あの赤い耳を思い出した。

第二章　条件の紙

三日後、剛志はまた小箱を提げて現れた。今度の銘は「待宵」。

月見の季節には早いが、宵を待つ、という名の菓子だった。待つ、という言葉を菓子に託してくるあたり、この男は口下手な分を全部、味に喋らせるつもりらしい。

俺は書き上げた条件の紙を、二部用意して、一部を彼に渡した。

「まず事業の条件から。……藤波堂の看板は、消さない。同盟後も、うちの店名、屋号、商標は藤波堂のものとして残す。これは絶対です」

「はい」

即答だった。彼は紙に目を落とし、俺の字を一字ずつ追っている。

「同じく、うちの銘菓『藤波』は、レシピも製法も、藤波堂の職人が受け継ぐ。同盟の共有ラインに載せない」
「はい。当然です」
「仕入れの共有は原材料まで。職人の人事は互いに干渉しない。催事の出店枠は売上の比率で按分ではなく、出店ごとに交互に優先権を持つ」
「はい」
彼は全部に頷き、時々、懐から出した手帳に走り書きをした。字は驚くほど几帳面で小さかった。あの大きな手で、こんな字を書くのか。
「生活の条件。……婚約期間中――いえ、同盟が続く限り、住まいは巌月堂の離れを改装した棟に、二人で住む。ただし寝室は別に用意する。互いの店の仕事に、口出しはしない。休日は、月に二日は互いに完全に自由にする」
「……はい」

初めて、頷くまでに一拍の間があった。寝室は別、のところで、彼の眉がほんの少しだけ動いた。だが彼は何も言わず、手帳に書いた。

「最後に。……これは条件というより、確認です。この婚約は、家の同盟が目的です。恋愛感情の有無は、互いに問わない。……そういう形で、いいですか」

応接間が、しんと静かになった。

剛志は手帳を閉じ、ゆっくりと顔を上げた。怖い顔のまま、どこか傷ついたような目をしていた。——ああ、しまった、と俺は思った。問わない、と言ったのは俺の側の防衛だった。自分が傷つかないための、先回りの線引きだった。だがそれは同時に、相手の気持ちなど端から無いものとして扱う言葉でもあった。

「……分かりました。その条件も、飲みます」

彼はそう言って、でも、と続けた。

「一つだけ、俺からも、条件を出していいですか」
「どうぞ」
「月に一度でいい。俺と、二人で、厨房に立ってください。……味のことは、言葉より先に、手が覚えるんで。あんたの作るものを俺が知らないまま、俺の作るものをあんたが知らないままでは、同盟も、その、婚約も、形だけになると思う」
それが、彼の唯一の条件だった。脅しでも、見返りでもない。ただ、知りたい、というだけの条件。
「……分かりました。その条件、受けます」
「ありがとうございます」
彼は深々と頭を下げ、帰り際に、もう一つの小箱を置いていった。開けると、中には

「藤波」

を模した小さな菓子が入っていた。うちの銘菓の形を、巌月堂の仕様で作り直した試作品。断面を割ると、中の餡の配合が、うちのものとは少しだけ違っていた。こちらの方が、後味が軽い。

彼はもう、俺の店の味を調べ上げている。怖い顔で、黙々と、誠実に。

その夜、祖父に呼ばれた。

「透真。剛志くんはな、不器用なだけで、悪い男じゃない」。

祖父は茶を啜りながら笑った。

「あの顔でな、子供の頃からずっと損をしてきた。友達ができん。好きな子ができても、告げた途端に逃げられる。……だからあの子は、気持ちを言う代わりに、菓子を作ることを覚えたんだ」。

俺は

「藤波」

の試作品のことを、祖父には言わなかった。言えば、祖父はきっと得意そうに笑うから。

第三章　月に一度の厨房

最初の
「月に一度」
が来たのは、契約書の調印が終わった週末だった。場所は巌月堂の厨房。夜、店を閉めた後の、粉と砂糖と、蒸気の匂いのする場所。
剛志は割烹着姿だった。怖い顔に白い割烹着、頭には手拭いを巻いて。……似合っていた。怖さが、職人の迫力に変換されている。映画の極道ではなく、映画の職人だった。
「今日は、基本の練り切りを。あんたの手つきを、見せてください」
「俺の方が、年下で、格下ですけど」
「菓子の世界に、年の上下は関係ない。うまい奴が、上です」

彼は本気でそう言った。俺が白餡を練り、着色し、茶巾で絞る間、彼は少し離れた場所で、腕を組んで、じっと手元だけを見ていた。視線は厳しいのに、不思議と居心地が悪くない。品定めの目ではなく、学ぶ目だった。

「……手首の返しが、速いですね。藤波堂は茶巾絞りの形が命だからか」

「よく見てますね」

「あんたの菓子は、全部食べました。懇親会の出品も、店頭の生菓子も、干菓子も。……『藤波』の餡、最後にほんの少し塩を振ってるでしょう。あれ、真似しても、同じ加減にならなかった」

「塩の加減は、五代目だけが知ってる分量です」

「でしょうね」

彼は悔しそうに、でも少し嬉しそうに笑った。笑うと、怖い顔が、ほんの少しだけ崩れる。眉間の皺がほどけて、目の鋭さが、普通の男の目の形になる。

その夜の厨房で、俺たちは互いの基本を教え合った。彼が俺に教えたのは、巌月堂の求肥の伸ばし方。大きな手が、信じられないほど繊細に、熱い求肥を薄く、薄く伸ばしていく。あの手は、人を殴るための形をしているのに、実際はこんなことのためにあるのだと、俺はぼんやり思った。

「剛志さん」

「はい」

「……なんで、俺なんですか。同盟の相手、他にも候補はいたでしょう。老舗の跡取り同士なんて、京都にはいくらでも」

手が、止まった。彼は求肥から目を離さずに、ぽつりと言った。

「懇親会で、あんたが、俺の菓子を食べてくれたからです」

「え」

「試食の席で、ほとんどの人は、俺の顔を見て、菓子に手をつけないか、つけ

ても味見だけして置く。あんたは違った。俺の『初嵐』を、全部食べて、しばらく目を閉じて、それから隣の人に言ったでしょう。『これは、すごい』って。……あの時、決めました。同盟をやるなら、この人とやりたい、って」

厨房の蒸気が、少しだけ目に沁みた。……いや、蒸気のせいだけではなかったかもしれない。

「俺は、あの時、あなたの顔を見てませんでした。菓子しか見てなかった」

「知ってます。だから、です」

彼は求肥を伸ばし終え、丁寧に布巾をかけた。

「俺の顔を見ずに、俺の味だけを見てくれた人は、あんたが初めてだったんです」

帰り道、彼は店先まで見送りに出て、来月の厨房の日取りを、手帳を確認しながら告げた。その足元に、小箱が一つ。

「今日の分です」。

中身は、俺の教えた茶巾絞りの形を、彼が自分の餡で作り直したものだった。形はまだ少しだけ歪で、餡の味は完璧だった。不器用と誠実が、同居していた。

その歪な茶巾絞りを食べながら、俺は認めざるを得なかった。条件の紙に書いた

「恋愛感情の有無は問わない」

という一行が、もう既に、少しだけ邪魔になっていることに。

調印式は、両家の店の真ん中にある料亭の座敷で行われた。事業提携契約書と、パートナーシップ宣誓書。弁護士と、両家の当主と、親戚の重鎮たちが居並ぶ中で、俺と剛志は並んで署名をした。

「緊張してますか」

休憩の合間、廊下で剛志が小声で聞いてきた。

「そりゃ、多少は」

「俺もです。……手、汗かいてます」

見ると、彼の大きな手のひらは、確かに汗ばんでいた。書類を汚すまいと、彼は何度も手拭いで手を拭いていた。その姿がおかしくて、俺は少し笑った。笑ったら、彼もつられて、ほんの少しだけ笑った。……

この男と並んで写真に写ると、俺は随分と穏やかな顔をした男に見えるだろう。横に立つ人間の怖さが、相対的に俺を柔らかく見せる。逆もまた真で、彼も俺と並ぶことで、ただの

「怖い男」

から

「跡取りらしい貫禄のある男」

に見えるらしく、調印式の後の集合写真を見た祖父が

「剛志くん、今日は随分と立派に見える」

と感心していた。同盟の顔、というのは、そういうことなのだろう。

問題は、式の後の祝いの席で起きた。

巌月堂の取引先である問屋の社長が、酒の勢いで言った。

「いやあ、岩永の若旦那も、とうとう身を固めましたな。相手が男とはいえ、

藤波堂さんとはお似合い……それにしても、あのご面相でよくぞ相手が見つかったもんだ。はっはっは」

座が、凍った。

剛志は、表情一つ変えなかった。いや、変えられなかったのだろう。への字に結ばれた口元はそのままに、彼は小さく

「ありがとうございます」

とだけ言い、酒を注ぎに立った。俺はその横顔を見て、胸の奥が、ちり、と痛むのを感じた。彼は慣れているのだ。顔のことを、酒席の笑いの種にされることに。そして、笑われる側が波風を立てない作法まで、身につけてしまっている。

「社長」

俺は自分でも驚くほど穏やかな声で言った。

「剛志さんの顔の話は、そのくらいにしていただけますか。……私は、この人の作る菓子の味で、相手を決めました。嘘だと思うなら、どうぞ、帰りに巌月堂の生菓子をお持ち帰りください。食べれば分かります」

社長は慌てて謝り、座はどうにか持ち直した。帰りの車の中、剛志はしばらく黙っていたが、やがて、ぽつりと言った。

「……ありがとうございました。ああいう時、庇ってもらったのは、初めてです」

「庇ったつもりは、ありません。事実を言っただけです」

「それが、一番、嬉しいんです」

信号待ちの車の中で、彼は前を向いたまま、それだけ言った。耳がまた、ほんのり赤かった。

同盟生活は、巌月堂の離れの棟で始まった。二人分の生活空間と、小さな

厨房のある棟。条件通り、寝室は別々。だが、朝食だけは一緒に取ることが、いつの間にか決まりになっていた。彼が淹れる煎茶は、温度の加減が絶妙だった。怖い顔で、湯呑みを両手で包むように持って、湯気の向こうで

「おはようございます」

と言う。それが、悪くない朝の始まりだった。

月に一度の厨房も続いた。二回目は藤波堂の厨房で、俺が求肥の応用を、彼が巌月堂の浮島の製法を教えた。三回目は、催事に向けた合同の新作の試

作になった。教え合う、という形は、いつの間にか
「二人で作る」
という形に変わっていった。厨房で並んで立つ時、彼は決して俺の手元に手を出さない。困った様子を見せた時だけ、
「手伝いましょうか」
と聞く。その距離の取り方が、丁寧で、少しだけ、寂しかった。

第五章　祇園祭の夜店

夏、祇園祭の宵山に、両店は初めて合同の夜店を出した。同盟の発表を兼ねた、商店街組合主催の催事だった。巌月堂の冷やし菓子と、藤波堂の焼き菓子を、一つの屋台で売る。夕方から人出は増え、屋台の前には行列ができた。

事件は、閉店間際に起きた。酔った男の客が、列に割り込んできた他の客と揉め、声を荒らげ始めたのだ。周囲の客が怯え、子供が泣き出した。俺が間に入ろうとした時、先に動いたのは剛志だった。

「お客さん」

低い声だった。怒鳴り声ではない。だが、百九十近い体躯が一歩進み出て、あの顔で静かに見下ろすと、酔客はぴたりと黙った。

「列は、こちらからです。……暑い中、待たせてすみません。よかったら、まず、これをどうぞ」

剛志は、冷やした葛菓子を一つ、紙に載せて差し出した。怒りを鎮めるための一手が、菓子だった。酔客は面食らいながらもそれを受け取り、

「……うまいな、これ」

と呟いて、列の最後尾に並び直した。周囲から、ほっとした空気が漏れた。その一部始終を見ていて、俺は思った。この男の怖さは、盾にもなるのだ。本人が望んだわけでもないのに生まれつき背負わされたものを、彼は、誰かを守るためだけに使おうとしている。

片付けの後、祇園囃子の遠い音を聞きながら、俺たちは屋台の裏で缶の茶を飲んだ。

「剛志さんは、すごいですね。あの場面、あんなふうに収められる人は、なか

なかいません」

「……慣れてます。酔った人や、怒った人は、まず腹に何か入れると、少し落ち着く。父に教わりました」

「怖がらせるためじゃなく、落ち着かせるために、あの顔を」

「顔は、選べませんから。使い方だけは、選ぼうと思って」

彼は空を見上げた。祭りの灯りが、怖い横顔を、橙色に染めていた。

「子供の頃は、泣かれるのが嫌でした。同級生にも、先生にまで怯えられて。……でも、菓子屋の息子でよかった、と、今は思います。怖がられたら、菓子を出せばいい。甘いものを食べてる間は、誰も、喧嘩をしませんから」

その夜、離れに戻ってからも、彼の言葉が頭を離れなかった。顔は選べない。使い方だけは選ぶ。この男は三十三年間、そうやって生きてきたのだ。誰かを怯えさせる側に回ることもできたのに、一度も回らなかった。

寝室は別、という条件が、この夜ほど恨めしく思えたことはなかった。……いや、違う。条件を出したのは俺だ。彼はそれを、一度も破ろうとしていない。約束を守る男なのだ。破るなら、俺の側から、条件の紙を書き換えるしかない。

俺は机の引き出しを開け、条件の紙の控えを取り出した。

「恋愛感情の有無は、互いに問わない」

の一行を、しばらく見つめた。ペンを取ろうとして、やめた。まだ、早い。……いや、本当は、怖かったのだ。書き換えた先にあるものを、全部受け止める覚悟が、まだ俺には無かった。

第六章　選ばれている、ということ

秋のはじめ、月に一度の厨房の日。合同の新作として、巌月堂の浮島と藤波堂の餡を組み合わせた生菓子が、ほぼ完成の域に達していた。銘は二人で決めた。

「結び月」。

二つの店の味が、一つの菓子の中で結ばれる、という意味を込めた。

試食の時、剛志は俺の作った断面を見て、長く黙っていた。

「どうですか。……何か、問題が」

「いえ。……完成度が高すぎて、言うことがない」

彼は真剣な顔で言い、それから、少しだけ困ったように笑った。

「正直に言います。俺は、あんたの腕が、羨ましい。藤波堂の繊細さは、

巌月堂にはないものです。……同盟がなかったら、俺は一生、あんたをライバルとして、遠くから見ているだけだったでしょう」

「剛志さん」

「はい」

「ライバルとして見ていた頃と、今と、どっちがいいですか」

間の悪い質問だった。厨房の空気が止まった。剛志は俺から目を逸らさず――この男は、こういう時、決して目を逸らさない――ゆっくりと答えた。

「今です。……即答です、今がいい」

「そうですか」

「はい」

それだけの会話だった。だが、その夜、離れの台所で、彼が置いていった小箱の中身は

「結び月」

の試作ではなく、俺の好きな、巌月堂の栗きんとんだった。なぜ俺の好物を知っているのか。以前、祖父との雑談で

「透真は栗きんとんに目がない」

と聞いたらしい。覚えていて、作って、黙って置いていく。この男の求愛は、最初からずっと、こういう形をしていたのだ。言葉ではなく、菓子で。交渉のたびの小箱も、試作品も、全部。

その夜、俺は眠れなかった。金色の栗きんとんを一つ食べて、残りを冷蔵庫にしまい、条件の紙の控えを、また取り出した。今度は、ペンを取った。

「恋愛感情の有無は、互いに問わない」

――その一行に、線を引く。そして、欄外に書き添えた。

『この条件は、撤回を検討中。』

検討中、としか書けなかった自分が情けなかったが、それでも、線を引いたのは事実だった。

翌日、思わぬ来客があった。藤波堂の本店に、業界紙の記者が取材に来たのだ。同盟と

「結び月」

の評判を聞いての取材だった。記者は笑顔で、だが遠慮なく聞いた。

「ところで藤村さん、お二人の関係は、ビジネス上の形だけ、ということでよろしいんでしょうか。読者は、そこのところを一番知りたがっていまして」。

俺は言葉を選んだ。

「家の同盟が先にありました。でも――」。

言いかけて、止まった。まだ、彼と何も話していない。この人の気持ちを、俺が勝手に代弁することはできない。結局、

「二人で作っている菓子が、答えです」
とだけ答えた。記者は不満そうだったが、それ以上は追及しなかった。
その日の夜、剛志は取材の記事の速報を、ネットで読んだらしく、台所で俺に言った。
「……すみません。俺のせいで、あんなことを聞かれて」。
謝る場所が違う、と俺は思った。
「気にしないでください。答えは、菓子だ、と言っておきました」。
彼はほんの少し笑って、
「じゃあ、もっといい菓子を作らないと」
と言った。
選ばれている、という感覚は、こういう小さな積み重ねの先にあるのだと、その頃の俺はようやく分かり始めていた。大声で愛を告げられることでは

ない。覚えていてもらうこと。困った時に、先に動いてくれること。謝る場所の違う不器用さを、愛おしいと思えること。俺は三十三年間この男に背負わされてきた孤独の重さを、まだ全部は知らない。だが、知りたいと、思うようになっていた。

「結び月」

は、発売と同時に評判になった。両店の合同商品として、百貨店の催事でも扱われ、業界紙にも取り上げられた。同盟は成功だった。――はずだった。

雲行きが変わったのは、巌月堂の本家筋の親戚、岩永の叔父が言い出した一言からだった。

「結び月がこれだけ売れるなら、いっそ藤波堂の生菓子ラインを、巌月堂の製造に統合した方が、効率がいいのではないか」。

それはつまり、藤波堂の厨房を閉じ、職人を巌月堂に移し、

「藤波堂」

の名は販売の看板としてだけ残す、という話だった。看板は残す。だが、中身は消える。俺が条件の紙に最初に書いた

「銘菓のレシピと製法は藤波堂の職人が受け継ぐ」

という条項への、真っ向からの抵触だった。

話は正式な提案として、両家の会議に上がった。祖父は激怒し、巌月堂の祖父は困惑し、会議は平行線に終わった。帰り道、俺は剛志に聞いた。

「剛志さんは、この話を、知っていたんですか」

「……会議の三日前に、叔父から聞きました」

「なぜ、教えてくれなかったんですか」

彼は黙った。車の窓の外を、京都の夜の灯りが流れていく。

「止めようと、動いていました。叔父を説得して、話自体を潰すつもりだった。……あんたに心配をかける前に、片付けるつもりでした」

「それは、俺への優しさのつもりですか」
「……はい」
「違います」
俺の声は、自分でも思ったより冷たかった。
「条件の交渉の時、あなたは言いました。できないことはできないと、その場で言う。嘘の約束はしない、と。……今回のことは、嘘ではないかもしれない。でも、隠したんです。藤波堂の存続に関わる話を、藤波堂の跡取りに隠した。それは、対等な同盟のやることですか。……それとも俺は、守られる側の『嫁』ですか」
剛志の手が、ハンドルの上で、強く握り締められた。
「……すみません」
「謝罪は要りません。次からは、全部、先に言ってください。悪い話ほど、先に」

「はい」

その夜、二人の間には、初めて重い沈黙が落ちた。翌日も、翌々日も、朝食の席は静かだった。彼が淹れる煎茶の味だけが、変わらず丁寧だったのが、かえって辛かった。

一週間後、剛志は一人で叔父の家に乗り込み、話を正式に退けたという。巌月堂の製造責任者としての自分の地位を賭けて、

「藤波堂の厨房に手を触れるなら、俺は巌月堂を出る」

とまで言ったらしい。その話を、俺は祖父伝いに聞いた。剛志本人は、何も言わなかった。手柄を誇る男ではないのだ。ただ、その日の朝食で、彼は俺に、ぽつりと言った。

「……全部、先に言います。これからは」

「はい」

「叔父の話は、俺が止めました。……遅くなって、すみません」
俺は湯呑みを置いた。
「剛志さん。一つ、聞いていいですか。なぜ、そこまでして、うちの厨房を守るんですか。同盟の条項だから、ですか」
彼は少し考えて、首を振った。
「違います。……藤波堂の厨房が消えたら、あんたの作る『藤波』が、この世から消えるからです。俺は、あの味が好きなんです。……あんたの手が作るも

のが、好きなんです」

それは、告白だった。言葉を選ばない、まっすぐな、告白だった。彼は言ってから、自分でそのことに気づいたらしく、耳を真っ赤にして立ち上がり、

「仕事に行きます」

と逃げるように離れを出ていった。

俺は一人、朝食の膳の前に座り込んで、しばらく動けなかった。

第八章　条件の書き換え

その週末、月に一度の厨房の日だった。場所は藤波堂。俺は、厨房に入る前の彼を、応接間に呼び止めた。

「剛志さん。今日は厨房の前に、交渉の続きをしましょう」

「……交渉」

「はい。条件の、書き換えです」

俺は、例の紙を取り出した。最初に交わした条件書の、俺の控え。

「恋愛感情の有無は、互いに問わない」

――その一行には、もう線が引かれ、欄外に

「撤回を検討中」

と書かれている。

「この条件を、撤回します」
剛志は、紙と俺の顔を、交互に見た。怖い顔のままで、信じられないものを見る目だった。
「……いいんですか」
「聞いてください、最後まで。撤回する代わりに、新しい条件を出します」
俺は深呼吸をした。
「一、悪い話ほど先に言うこと。これは、この前決めた通り。二、……互いの気持ちについては、嘘をつかないこと。好きなら好き、嫌なら嫌と、その都度言うこと。三、寝室を別にする条件は、撤回します。……ただし、俺の部屋の扉には鍵がありません。あなたが入ってくる時は、必ず、声をかけてください。それが条件です」
言い終えた時、俺の手は震えていた。二十八歳にもなって、告白一つで手

が震える。だが、目の前の三十三歳の男は、もっと震えていた。大きな体が、小刻みに震えていた。

「透真さん」

彼は、初めて、俺を名前で呼んだ。

「俺で、いいんですか。……こんな顔で。こんなに、不器用で。……俺は、あんたに何も、普通のことが、してやれないかもしれません。人前で手を繋げば、子供が泣きます。写真に写れば、並んだ俺だけ、犯罪者みたいに――」

「剛志さん」

俺は立ち上がり、彼の前に立った。背伸びをしないと、目線が合わない。それでも、俺は彼の目を見上げて言った。

「俺は、あなたの作る菓子を食べて、この人を選びました。顔は、二番目です。……いえ、違いますね。今はもう、顔も込みです。あなたの顔を見て、怖いと思う

人は、あなたのことを何も知らない人です。俺は知っている。……だから、俺でいいんですか、じゃなくて。俺が、あなたを選んだんです」

沈黙が落ちた。長い、長い沈黙。やがて、彼の大きな手が、ゆっくりと、恐る恐る上がって、俺の頬に触れた。求肥を伸ばす時の、あの繊細な手つきだった。触れるか触れないかの、優しい圧。

「……ありがとうございます」

彼の声は、掠れていた。

「あんたに選んでもらえる日が来るなんて、思ってなかった。……三十三年、ずっと」

「長く待たせましたね」

「はい。……でも、待った甲斐が、ありました」

その夜は、厨房どころではなかった。二人で作るはずだった試作は翌日に

回し、俺たちは応接間で、冷めた茶を何杯も飲みながら、他愛のない話をした。彼の子供時代の話。菓子職人を志した日の話。初めて

「初嵐」

の原型を作った、十九歳の夏の話。話すたびに、この男の人生の、俺の知らない三十三年が、少しずつ手渡されていくようだった。

離れに戻る夜道で、彼は俺の少し後ろを歩いていた。いつもの、護衛のような位置取り。俺は立ち止まって、振り返った。

「剛志さん。並んで歩いてください」

「……はい」

彼は一歩、俺の横に進み出た。その大きな肩が、月明かりの中で、俺の肩と影を重ねた。並んで歩く。たったそれだけのことが、この男にとっては、三十三年越しの悲願だったのだと、俺はその横顔を見て知った。

第九章　初めての夜

離れの棟は、その週のうちに小さく改装された。と言っても、彼の部屋にあった本棚と、俺の部屋にあった机を、広い方の部屋に集めただけだ。寝室は、一つになった。

初めての夜は、結び月の百貨店催事が終わった、その夜だった。二人とも疲れ果て、離れに戻って、風呂を済ませ、彼は決まって小箱を差し出した。その日の菓子は、銘のない、真っ白な練り切りだった。

「……名は、まだありません。今日の、あんたへの菓子です」

俺はそれを食べて、言った。

「甘いですね」

「はい」

「……剛志さん」
「はい」
「今日は、俺の部屋――いえ、俺たちの部屋で、寝てください。声をかけて、入ってきてください」
彼は、しばらく固まっていた。それから、立ち上がり、部屋の入り口まで歩いて、律儀に、とん、とん、と柱を叩いた。
「……入って、いいですか」

顔は喧嘩、心はド純愛。

著者　碧汐

二〇二六年十一月八日

本作品はＡＩ一部利用です。制作工程の一部にＡＩを使用しています